

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症 例 概 要 利用者氏名: 80歳代 女性 要介護2

病 名: 進行性核上性麻痺、パーキンソン病

利用サービス: 訪問リハビリテーション

経 過: 令和4年頃より歩きづらさがあり、同年10月にすくみ足、動作緩慢の症状を認め、パーキンソン病の診断となった。同年11月に胸椎圧迫骨折にて経皮的椎体形成術を施行した。令和5年7月にADL低下による通院困難にて訪問診療を開始した。令和6年5月に転倒頻回で嚥下機能低下を認め、進行性核上性麻痺と診断された。令和6年6月にライフサポートねりまに入所し、その後同年6月にねりま健育会病院へ入院された。同年9月に自宅退院され、リハビリ目的で訪問リハビリ開始となった。

内 容

本事例は、自宅での生活が困難となるも当施設の回復期リハビリテーションを経て自宅退院した。既往歴のパーキンソン病に加え現病歴に進行性核上性麻痺を呈している症例である。

退院後は、病棟生活との違いと、病識の低下から自宅内で転倒を繰り返し、右側肋骨骨折を受傷。その後、歩くことへの不安や恐怖心から生活範囲の狭小化と活動量低下によりベッド上寝たきりの時間が多くなり、活気も徐々に低下しご家族の介助量も増加した。この頃、ご家族と主治医からご本人に対し、施設での生活を勧めるようになったが、ご本人は「家にいたい、家で年を越したい」というご希望を強く持っていた。

そこで訪問リハビリでは、ご本人の意思を尊重し、在宅生活を安全に継続できることを目標に「転倒しない身体づくり」、「安心して生活を行える環境調整」を行い、更にADLの拡大と余暇時間の充実を図ることを方針に介入していくこととした。

「転倒しない体づくり」では、改めて自主トレーニングを考案し、ご本人に実施状況を記録してもらう事で、実施状況の確認をできるようにした。また1日転倒しなかったら安全に過ごせた成果として「○」を付ける取り組みも行い、転倒に対する意識と病識への理解と向上を図った。これにより自主トレーニング実施状況の確認と成果の共有が可能となり、ご本人の活気と活動量は徐々に向上した。更にその経過を見守っていたご家族も自ら協力するようになり、お庭を一緒に歩行する取り組みも日常的に行えるようになった。

「安心して生活が行える環境調整」では、ケアマネージャーと福祉用具業者の協力を得て、週に一度、能力変化に応じた自宅内福祉用具の再調整が可能となるプランを作成、歩行器の変更等をタイム

リーに実施できるようになった。更に身体機能向上に応じてADLの拡大を認め、寝室だけの生活ではなく、自宅内全てで安全に自立した歩行器歩行での移動とADLが可能となった。また、余暇時間では作業活動としてご本人の趣味であった「スクラッチアート」を再開できるようになった。

この事例では、ご本人・ご家族に加え、地域スタッフで一つのチームとなり協働できたことで、ご本人の一番の希望であった「家で家族と過ごす」在宅生活が可能となり、自分らしく、楽しく毎日を過ごし、余暇活動も再獲得できるようになった。

そして、現在もご家族の中で穏やかに笑顔で過ごし、お庭でご家族と一緒に散歩もできており、活気あふれる生活を送ることができている。